

イデオロギーとしての母性考(1)

矢木 公子

拙稿「母性イデオロギー考」において、「母性」という言葉の用語法が母子保健・個人心理・社会心理のそれぞれにおいて重複部分を持ちつつも相違する側面を有しており、日常の用法としてはそれらをないまぜにしていることを指摘し、イデオロギーとしての「母性」について若干の考察を試みた。本稿ではそこにおいて触れることのできなかった幾つかの点について考え、今後の検討への一助としたい。

1

文部省が昭和59年に出した家庭教育資料「現代の家庭教育——乳幼児期篇」は、育児に関する最近の研究成果をもとにして従来の指導書の内容を一新したものとされる。その中で特に「胎児・新生児の能力」「母子相互作用」では、胎児においても従来考えていた以上に精神的・心理的に独立の人間としての能力を持っていることを明らかにして、それに基づき育児の本質を「出生の時点から、子供を一個の人間として取り扱うことにある」としている。そのような胎児・新生児観から出てくる母子関係として強調されているのが母子間の相互作用である。そこにみられる母子相互作用説は、従来からさまざまな表現によって示されてきた母子観・育児観と、その後のあらゆる人間関係の基盤を構成するのが母子関係という点では、同じである。しかしそれらと異なるのは、行動科学と心理学の研究成果を大幅にとりいれて「母性」が分娩後の比較的短い期間における母子の相互作用を通じて確立されるとする点である。(これに対して、子供の母親に対する愛着は出生後の比較的長期間にわたる母親からのシグナル行動に応答するレスポンス行動の反復によって形成されてくる。) ここにおいてもまだ「母性」が本能として女性の内部に備わっているかどうか、その点については科学的に明らかにされているとはいえない。しかし、最近の新生児と母親の分娩後の子供に対する初期行動の研究では、両者間のフェイス・トゥ・フェイスやアイ・トゥ・アイのコンタクト、ふれあいやホールディングによって母子間に一種のホメオスタシスが成立することが明らかになると共に、そのような関係を形成しない場合もあることから、分娩といったまったく生物的特性が直接に出てくる時の生得的と考えられる母親の初期行動を引き出す子供の側から出されているサインは何か、というのはまだ明らかではない。また未熟

児の出産の場合のように、分娩直後母子が分離されて2・3日経てから母子対面が行われた時、母親の方に上記のような行動が見られない。そこから文部省の上記家庭教育資料にみるように、「母性」は比較的短期間に確立されるというのである。それは、未熟児に対して母親が下手に触れたりしては危険だという恐れから、そのようになるだろうとも考えられる。これに対しては、未熟児の母親を二群に分けたその後の二年間にわたる追跡調査によって、そのような考えは否定される。その調査は、母親を新生児と出産後しばらく分離しておくグループと接触させるグループとに分け、タッチングの頻度を調べたものだが、それによると分娩後子供と接触したグループの方がタッチングの頻度が多かった。母親行動にはタッチングのほかにはスマイリングとホールディングがあるが、それらには分離・接触の条件による差はみられなかった。むしろスマイリングは子供の活動量との相関性の方が高く、またホールディングの方は社会階層や子供の出生順位（第一子あるいは末子といった家族内地位）による影響の方が大きかったという⁽¹⁾。

つまり、母親は分娩直後の子供との接触によってタッチングという母親行動を解発し、その後それを発達させていったといえる。そこには学習ということが、大きく作用している。

それはまた、初期の母親行動を解発するような分娩環境の要請を、もたらすであろう。現に今、親と子の双方にとって心身共に満足な形は、どのようなものかという模索がなされている。裏返せば、近代以降分娩はそのような母子の観点から考えられてきたのではなく、産科学の側からの科学的・合理的・能率的といった点から考えられてきた。（だからといって、近代以降の科学的産科学が、まったく人間の幸福に寄与しなかったというのではない。それは、分娩および育児における衛生環境を著しく向上させて、産婦および乳児の死亡率を低下させてきた。）その結果、母親が初期の母性行動を解発させて、その後の学習によって「母性」を形成していくことには、ほとんど配慮してこなかった。

2

その研究成果が、自由主義の人間観・人間学を構築する基礎となったと評価される動物学者アドルフ・ポルトマンは、誕生直後の状態がどのようなかによって動物を「就巢性」と「離巢性」に分けて、人間は本来「離巢性」の動物にも関わらず、比類ない脳の発達から一年の「生理的早産」児であるとした。他の哺乳類とは違い、この一年間の外界と接しながらの他者への依存と相互作用の関係が、「母性」に対するさまざまな観念や評価を生み出す。新生児と母親との間のホメオスタシスの関係は、相互に心地よい状態を作り出す。それによって母子の共生関係が成立するのだが、本来「離巢性」の人間の子供にとって、この共生状態はその生理的早産の時期を過ぎると、いつまでも留まってもよいものではない。

とはいっても、母と子のこの分ち難い互いを包み込む「神秘的分有（participation mysti-

que)⁽⁴²⁾」関係は、いつも容易に相互分離、自立に移行するとはいえない。両者の分離には、文明、それを象徴する父の介入が、必要である。この要素を欠く時、母は子を暖かく包み込み保護するようみえながら、実際には、子供が本来は備えている自立性(離巢性)を阻み続ける存在となる。

ほとんどの文化は女性性の中心に母性を据えてきたし、現在もそうである。しかし、母性の特性の何に重点を置いてきたかは、時代と社会によって、異なるであろう。文明の揺籃期においては女性の生殖力が人々に畏怖の念を抱かせるとともに、人間の力の及ばぬ恐ろしさを感じさせ、善と悪・友好性と敵対性といった対立する二要素、すなわち二義性・多義性を統合して一体性を持つ人々の集合的無意識としてグレート・マザーを形成して、今日まで個人と社会のあり方に影響を与えてきた。グレート・マザーは、暖かく包みこむ肯定的側面と、呑みこんでしまう否定的側面からなる。ノイマンは、グレート・マザーのような元型に分かれる前段階として「元型それ自体」の状態があり、そこから特殊化した「大いなる男性」「大いなる女性」といった「原型」を考える。つまりノイマンは、「元型を《永遠の現存》を意味する構造概念として用い⁽⁴³⁾」るが、「意識の歴史の理解や、精神療法の実践のためには、心の中での《発達》という意味での元型の分化が重要である⁽⁴⁴⁾」として、元型を分化する。そして元型の「起源的側面を強調⁽⁴⁵⁾」して、これを「原型」と呼ぶ。「原型」の「大いなる女性」からグレート・マザーが生まれるが、その構成要素の間に秩序が現れて、三つの形が現れてくる。良性の女性的(および男性的)要素は「良い母(グッド・マザー)」を生じ、否定的要素からは「恐るべき母(テリブル・マザー)」が、そして否定的属性と肯定的属性を統合する「良く悪い母(グッド・テリブル・マザー)」、すなわちグレート・マザーが現れる。社会が、その秩序を維持し子の養育を支障なく遂行するために、女性に期待するのは「良き母」である。しかし、現実の女性の心性が二義的・多義的であるところから、いずれか一方だけの要素からなる形は、ありえない。そこから、必然的に両要素を備えるグレート・マザーが、人々の意識にとって重要となる。ところが複雑なことに、ごく普通のあり方をすれば、およそ社会が強調する「良き母」はそんなに多く現れないと思われるのに、人々の心の中にある社会的期待や他の人々の期待に沿い、何らかの賞讃・報酬を得たいという欲求は根強く、皮相をみれば「良き母」と思われるように、演じる。しかし、それは、「良き母」の仮面をつけているにすぎない。その実態は、我が子を呑みこむ性質も、備えているのである。面倒なことに、母親自体は、母が子に対して悪しき側面を持つなどと考えもしないし、子供の方も心地よい母との一体感に満足している状態を、敢えて断ち切ることなど、およそ思いつかない。気がついた時には、既に半分呑みこまれているのである。母子の間に、父親のようなその一体性を破壊する存在が、子供の自我の形成意欲が生じてきた時に、必要とされるのは、そのような異質性をもった存在が加わることで、子供にはまだ自己を対自的にとらえることは困難であっても、母親は程度の差はあるとしても自己を他者の目からとらえることが可能となる。いうまでもなくここでの父親は、象徴的な意味での父親であって、現実には、父親が存在するかどうかといった問題ではない。かえ

って、現実の問題としては、父親がいてもその機能を十分に果たしていないために、母子関係や他の家族内および家族外の人間関係において、問題が生じている。最近、登校拒否児童の増加が問題となっているが、その原因の一つとして、機能的な意味での父親不在が、あげられている。つまり、登校することは母親との心地よい共生関係を壊すことであり、苦痛以外の何ものでもないのである。それほどまでに何故、母親との関係は、断ち難いのか。

3

ここで愛の問題に立ち入らざるをえなくなる。フロムはその愛の理論において、人間の実存が、分離による不安を余儀なくされているのを再合一するのが愛であり、「愛による再合一なしに人間の分離を知ること…それが恥の源⁽⁶⁾」であるとする。愛を、「共棲的合一」と呼ばれる妊娠した母親と胎児との関係にその典型をみる形と、実存の問題への解答としての形とに分けて、後者のみを、人間独自の追求すべきものとする。共棲的合一の受動的な形が服従であり、能動的な形が支配であるとする。すなわち、マゾヒズムとサディズムである。いずれにおいても、自分あるいは他者を、相手あるいは自己の部分とすることによって、「孤立と分離」から逃れようとする。

他方、実存に対する愛とは、活動であり受動的な感情ではない。そのような積極的な愛の構成要素は、与えることを第一として配慮、責任、尊敬、知識である。与えるということ、もっとも重要なのは、「ヒューマン（人間的）」なものであることであり、物質的にはない。ここにおいては、与えることは、奪われることでなくそのことによって「私の生」が充満し表現されるから、受けるよりも与える方が一層楽しくなるのである。海綿のようにいくらでも愛を受容する子供に対する時は、与えるという行為がさらに加速し興奮する。フロムは、配慮がもっとも明らかに現れるのは、母親の子に対する愛においてであるとする。これは、愛の他の側面である責任と、不可分である。この場合の責任は、外部から課せられた義務の意味ではなく、内部から生じる感情と行為をいう。愛の構成要素に尊敬が含まれなければ、責任は「たやすく支配や所有に墮してしまふ⁽⁷⁾」かもしれない。尊敬とは、「語源 (respicere = ながめる) に従えば、人のあるがままに見、その特異な個性を知る⁽⁸⁾」ことである。このような性質をもつ要素によって愛は、共棲的合一の愛に墮するのを、免れるのである。そしてさらに、愛が知識の要素を欠いていれば、人を尊敬することは不可能であるし、配慮と責任は不適切なものとなる。相手のことを知らなければ、何をどのように与え、配慮すればよいのか分からない。したがって知識は、愛に方向性を与える。知識は多くの層をもつが、愛の構成要素としての知識は、「対象の周辺にとどまることなく、中核にまで侵入する⁽⁹⁾」類いのものである。知識は尊敬に支えられて、他者があるがままにみる時、他者が表現していることよりもさらに深く、その内面の怒り、不安、孤独等を知り、他者を理解することが可能となる。このような知識は、人間の神秘を知る一つの方法である愛の中核を成す

と同時に、完全な知識は、愛によってのみ、到達される。そこでフロムは、「心理学の究極の帰結は愛⁽¹⁰⁾」であるとし、科学としての心理学は限界を持つとする。このような構成要素を持つ愛をフロムは、先に活動性であると言ったように、状態ではなく行為であり、何よりも技術であるとする。そうであるからこそ学習しなければ、愛は、実現しない。このような愛は、技術と実践について、習熟を必要とする。

このようなフロムのいう愛の構成要素は、異性愛、親子間の愛、そのほかすべての人間関係における愛に共通するけれども、どの要素が強くなるかは、その対象と状況によって、さまざまである。フロムはさらに愛の種類に言及し、兄弟愛を基本的な愛の形とし、次のように述べている。「もしも私が愛に対する能力を発達させたならば、その時には私は私の兄弟を愛さざるをえない。兄弟の愛の中にこそわれわれは、全ての人との結合、人間の団結、人間の一致を経験する……中略……才能、知能、知識に差異があるとしても、それは、すべての人びとに共通な人間の中核をなすものの同一性に比較すれば無視できるものである⁽¹¹⁾」ここにみる愛の姿は、人間の強固な意志に支えられた人々の協同を、個々の人間の生存の大前提となるものである。これはすぐれて人為的・社会的な愛の形ではないか。

兄弟愛が同等のもの間の愛であるのに対して、母性愛は無力な者への愛である。子供が全面的な保護・助力を必要とする存在であるところから、そしてそれに対して母親は、無条件に子供に与えるところから、両者の関係は、不平等そのものである。この利他的な非利己的な性格から、母性愛は神聖視されてきた。しかし、フロムは「母親の愛の本質は、子供の成長を世話することであり、そのことは、子供が彼女自身から分離することを望むということを意味する⁽¹²⁾」とする。これもまた、不平等な関係とはいいいながら母親が子供を他者としてみている点で、もはや共棲的な関係とは、異質のものである。共棲的母子関係からこのような母子の関係に質的転換を図るのを可能にする要素は、唯一母親の子との分離を耐え忍ぶ能力である。この能力が欠如する時、共棲的関係を終了することができず、母親は、父親と子との間の関係をより緊密にするという任務を全うできなくなるのである。子供は、母親との共棲関係から抜け出すことによって、父親や他の人々と自己とを関係づけて、その世界を広げるとともに自立の道を歩むのである。

兄弟愛と親子の間の愛、とりわけ母子間の愛が、対象をひとりに限定しない愛であるのに対して、エロチックな愛は対象を限定する点、離れている人間の合一を、完全な他者との融合を渴望するものであり、排他的で普遍的でない点で、性質を異にする。しばしばみられる独占欲は、二人の人間が互いを同一視しあっている自己主義なのだ、フロムはいう。それは、自分達を他の人々から疎外し分離している点において、排他的とは異なる。排他的とは、自分を十分に融合できるのはひとりの人間との関係においてであっても、他の人々を愛することには変わりない性質をいう。

さらに自己愛について、フロムは考察を進めて、これまでカルヴィンやフロイトを始めとして

多くの人が、自己愛と利己心を混同して罪悪視してきたが、そして社会の中に自己愛を悪とする信念が浸透しているが、論理的にいて、それは矛盾であるという。愛が人間を対象として存在するのであれば、自分とても人間なのだから疎外するのは、論理的誤謬を犯していることになる。自己愛と利己主義は同一のものではなく、利己的な人は、本当は、殆どあるいは全く自分を愛していないのである。自己愛と他者への愛は二者択一の関係ではなく、両立の関係に立つ。自分自身を愛する能力を有するからこそ、他者をも愛することができるのである。利己的な人が他者を愛せないのはすぐ見出せるが、その人が自己をも愛していないのは、容易に見出せない。フロムは、自己愛がなく、したがって子をも愛していないで、むしろ子への敵意を抑圧している母親が、無意識の次元で愛の能力の欠如の代償作用を行い、子について取越苦勞をするという例をあげている⁽¹³⁾。さらにまた、「非利己的」な人というのは、自分自身は《他のひとのためだけに生きている》と思っているし、「自分自身を重要なものだと考えていないこと」を、誇っている。しかし、その内面は生への憎しみで満ち満ちているし、その背後に強い自己中心性が隠されているのである。非利己的な母親と子供の関係においては、母親が表面上持っている利他的な態度にも関わらず、子供は不安、緊張を示し、母親の非難を恐れる。母親自体も意識の上では、子供の幸福を願っているのであるが、子供に伝わるのは、母親の意識しない隠された敵意と生への憎しみなのである。

最後にフロムは、神の愛について理論を展開しているが、それは心理学的には今まで述べてきた人間間の愛と特に性質を異にするものではなく、同様に分離を克服し合一を成就しようという欲求から生まれたものである。この愛の形については、今ここでこれ以上立ち入ることは控えたい。

4

フロムの愛の理論における母性愛は、クリステヴァのアブジェクトとしての母の本質とも、テンニースがゲマインシャフトの本質的性格とした母子関係とも、異なる。前述のようにフロムの母性愛は、母子関係以外の関係における愛と同様、学習し習熟するものであって、生物的に伴っている愛着と異質のものである。そこには明確に近代以降の人格・人権への志向が反映しているし、社会が介在している。フロムの愛は技術という考え方を、とりわけ母性愛については、私達日本人は採り入れてこなかった。母性・母性愛は女性に本来備わっているものであり、改めて学習するものとは考えてこなかった。むしろ日本社会の文化の基層部分にある靈魂観等のシャーマニスティックなものが影響して母性・母性愛の様相は、まったく違ったものである。

皆川美恵子は、近世・幕末の天保十年（1839）から嘉永元年（1848）迄の十年間にわたる桑名藩の下級武士親子間に交わされた日記から、当時の母親が病弱なわが子に対してどのようであったかを明確にしているが、そこにみられる母の心情や行動の仕方は、現代の母親に共通するもの

であるだろう。現代においては潜在した形になっているものが、当時においては強烈な直接的な形をとっているのだから、非常に分かりやすい。そこで、少し概略を記しておこう。

渡部勝之助・菊夫婦の次男真吾は、「胎毒」の皮膚病に繰り返し見舞われ、悩まされる。とりわけ「胎毒」は、赤ん坊が体内で母親の毒を吸収した為とされているところから、母親菊の子への罪の意識は相当なものであり、症状が一進一退を繰り返すところから、母親の思い詰めようは次第に激しくなっていく。医師も手を焼き、種々の試みもあまり効果をみせないとなった時、母親菊はわが子のまだ頼りなく容易に遊離してしまいそうな魂をこの世に留めておこうと、自身ができるあらゆる手だてを実行する。赤ん坊を横臥させるのは死のイメージと重なることから、そしてわが身の温もりと生きる力を子へ伝染させることを信じて、赤ん坊を懐へ入れたまま夜になっても帯も解かず抱き続け、食事も立ったまま摂る。神仏への祈願が並々ならぬことの証として「塩断ち」「毒断ち」を、一定期間行う。「毒断ち」とは、赤ん坊に与える乳に障らぬように、毒を鎮めたり毒にかからない食物だけを食することである。入浴も医者が当分見合わせたほうがよいと言ったと言ひ張り、周囲の勧めを頑強に拒絶し続けて、垢と赤ん坊の血膿にまみれて、髪もとかず虱もたかるといすさまじい姿になっている。栄養価の低い食事と看病疲れから、自身もとうとう出来物を作るようになる。しかしそれを苦にするのは夫の方で、本人は一向に気にかけるふうにない。聖と汚れを合わせ持ったその姿には、巫女のイメージが重なりあう。食物を始め種々の禁欲を自身に課する姿は、苦行をする宗教者のそれではないか⁴⁴⁾。

このような、わが身が原因とされる病いにかかった子をもつ母のあり方は、当時のように乳児死亡率の今と比べようもないほど高い状況であつては、無理からぬことかもしれない。だがそこに展開される母子の関係は、フロムの説く愛の世界とは隔絶する。それはまた共棲的合一とも質を異にする、母と子の一体化である。母が子に一体化する形での、一体化である。そしてそこには、宗教的苦行と同じような過程がある。それを経ることによって始めて、母は子の魂をしっかりと自分の懐の中に繋ぎとめることができるのである。このような母の姿は、単に過去のものといいきれるであらうか。現代でも、子供の発達課題の達成において子供が経なければならない試練を、自分も同じように引き受けるという母親はなんと多いことか。

このような母は、子にとって何ものにも替え難い存在であり、最終的に魂の依り所とする存在であるとともに、自分を捕らえて離さない、否むしろ離れることさえ子は考えない崇高な存在である。やはり、子の自立にとっては、その足を引っ張る存在であり、呑みこむ母である。だがしかし、そのような母が日本の社会においては、あまり問題視されず、その崇高性のみが高く評価されるのは、日本人の心性に、他者依存の傾向が根強くあることも、一因であらう。つまり、最終決定は、非合理的他者に、たとえば神仏や巫女等に委ねるのは、決して過去の姿ではなく、現在も社会生活の細々とした点においても、みられるのである。反対にこの他者依存の日本人の心性が、母性を強調する必要性を、何よりも強くもっているのかもしれない。

〔注〕

- (1) 河合隼雄・藤田統・小嶋謙四郎, 『母なるもの』, 二玄社, 昭和60年, 61~62頁。
- (2) エリッヒノイマン, 『グレート・マザー』, ナツメ社, 1983年, 45頁。
- (3)(4)(5) 前掲書, 22頁。
- (6) エーリッヒ・フロム, 『愛するということ』, 紀伊国屋書店, 1983年, 12頁。
- (7)(8) 前掲書, 37頁。
- (9) 前掲書, 38頁。
- (10) 前掲書, 43頁。
- (11) 前掲書, 64頁。
- (12) 前掲書, 70頁。
- (13) 前掲書, 83~84頁。
- (14) 皆川美恵子, 「女としての母」, 『現代思想』, 84年7月号, 青土社。

参考文献

- J. クリステヴァ, 『恐怖の権力』, 法政大学出版局, 1985年。
佐々木孝次, 『母親と日本人』, 文芸春秋, 1985年。
文部省編, 『現代の家庭教育——乳幼児期編——』, ぎょうせい, 昭和60年。
アドルフ・ポルトマン, 『人間はどこまで動物か』, 岩波新書, 1977年。